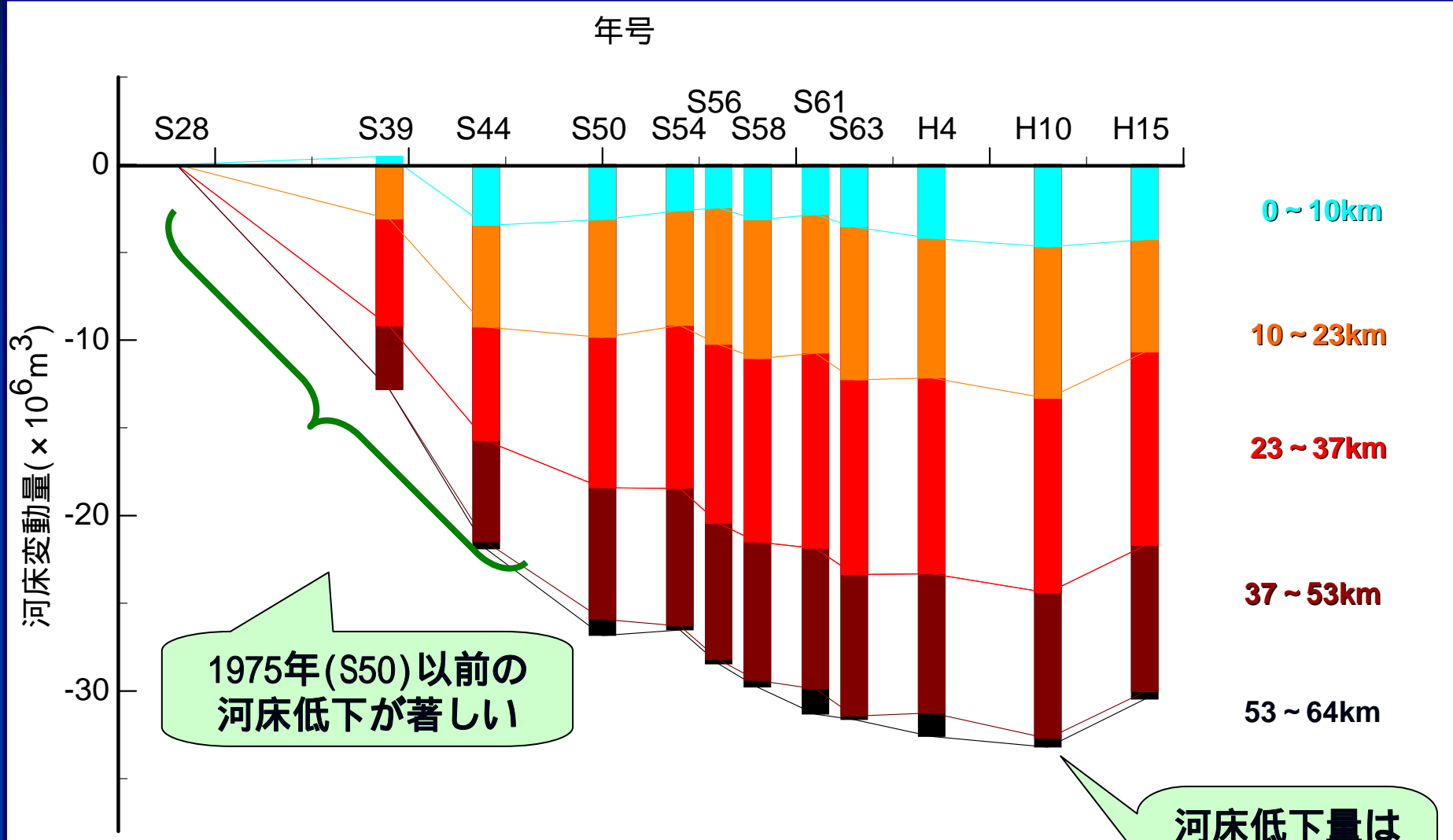


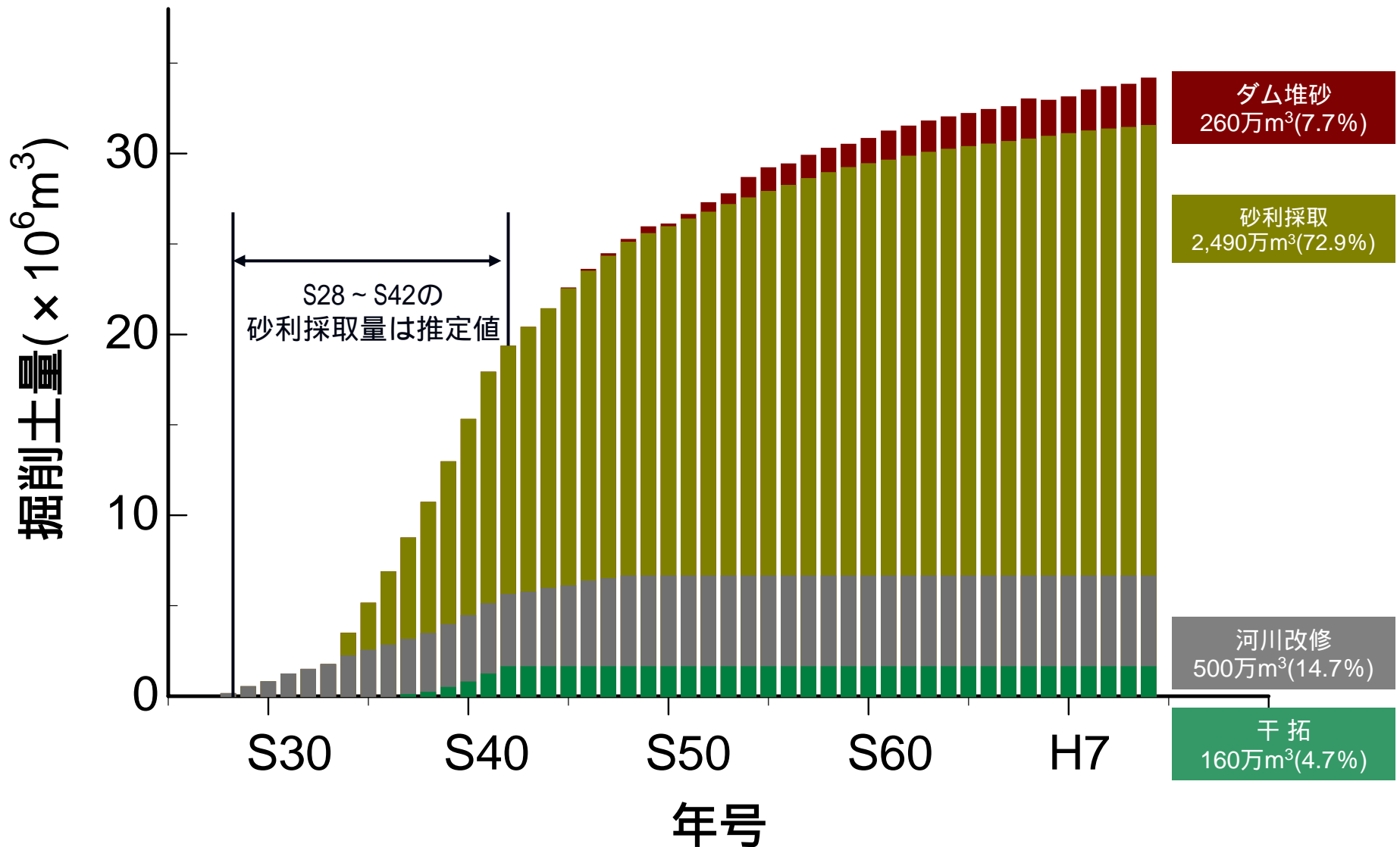
河床の変動と河床構成材料

長期的にみた河床変動量

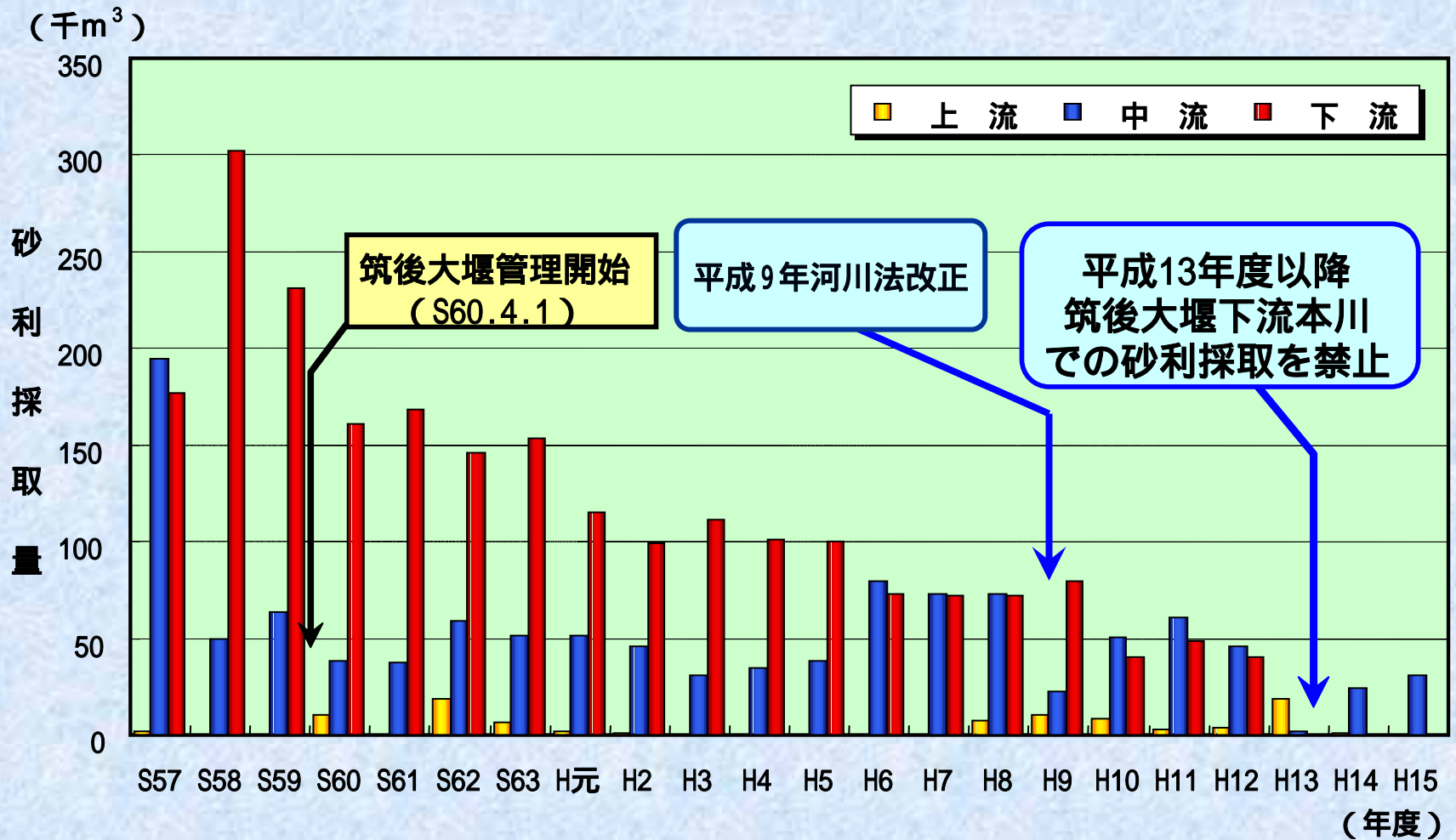


昭和28年を基準とし、各断面ごとの変動量を算出・累計したもの。
正が増加（堆積）、負が減少（侵食）を表す。

河川からの土砂の持出し等



砂利採取量 - 筑後川水系 -

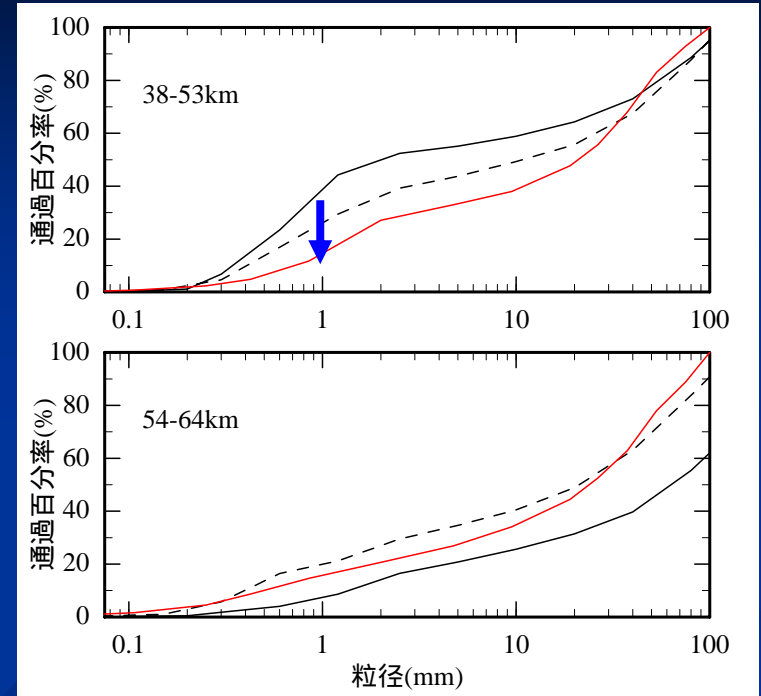
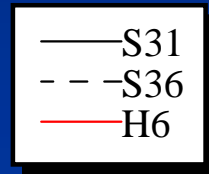
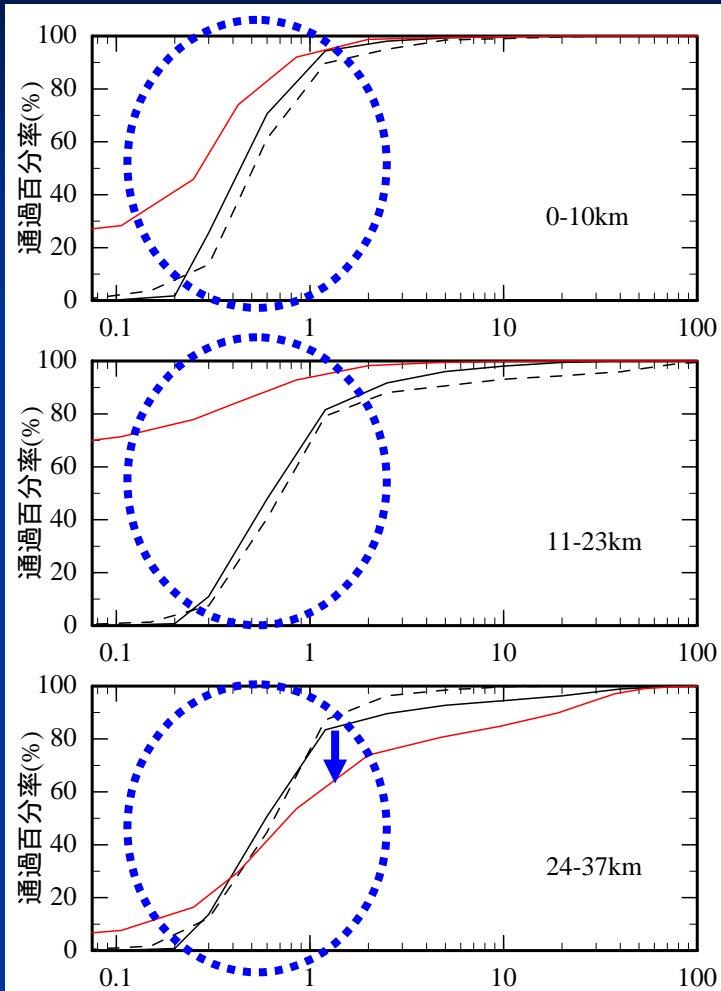


砂利採取量は直轄管理区間のものである。

上流：福岡・大分県境より上流の地域、中流：福岡・大分県境から筑後大堰までの間、

下流：筑後大堰より下流の地域

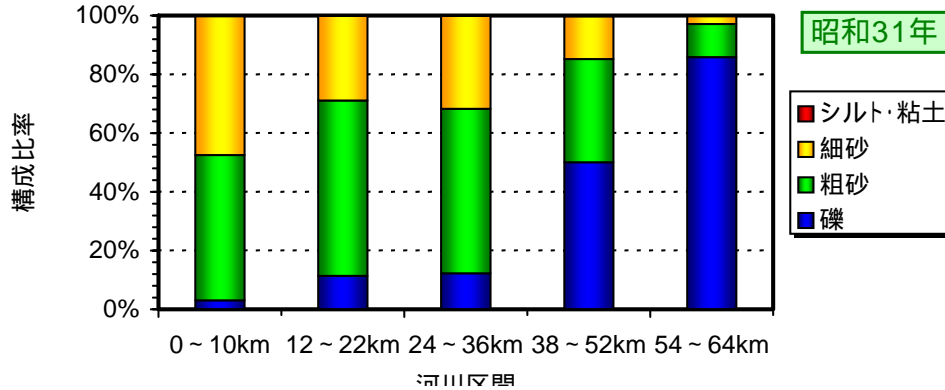
河床材料の変化(1)



砂利採取は主に中下流域(0~40km)で行われ、採取区間の主材料は昭和30年当時、「砂」であった。昭和30年代から平成にかけて、河床材料から「砂」が抜け落ちている。

河床材料の変化(2)

昭和31年

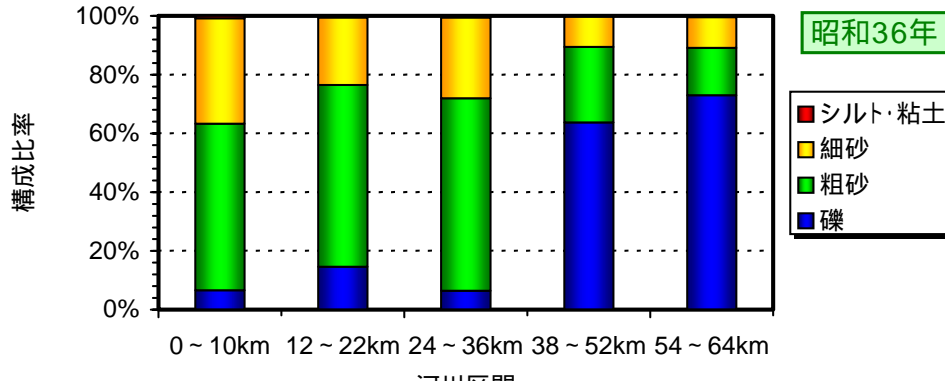


粒径区分

- シルト・粘土 0.075mm未満
- 細砂 0.075 ~ 0.42mm
- 粗砂 0.42 ~ 2.0mm
- 礫 2.0mm以上

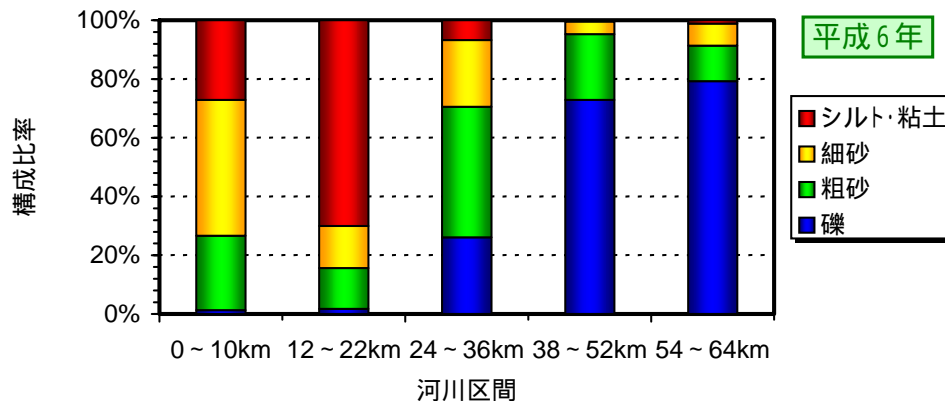
昭和31年のシルト・粘土と細砂の区分は0.1mm

昭和36年



昭和30年代の河床材料は下流ほど**細砂・粗砂**が多く、上流ほど**礫**が多く分布していた

平成6年



平成に入ると、下流で**シルト・粘土**が増加し、**細砂・粗砂**が減少した